

令和5年度 生活科主題研究計画

北九州市立あやめが丘小学校

1. 研究主題

地域を学びの糧に、確かな力を育てる生活科学習指導の工夫

2. 主題設定の理由

①児童の実態

真面目で何事にも最後までやり遂げようと努力することができる子どもたちである。また、授業においては、落ち着いた態度で学ぶことができるとともに、自分なりの思いや考えをもって学習に参加する子どもが多い。一方で、考えはあっても伝えることを躊躇していたり、誰かが話してくれるだろうと人任せにしてしまったりする様子が見られることがある。学びの場に身を置いてはいるものの、聞くことだけに終始している子どももいる。進んで話し合い、振り返り、これからの生活に生かしていくことができるような、自分にとって価値のある学びへと深めていく必要があると考える。

②生活科のねらいから

近年は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、予測困難な時代になっている。このような時代に子どもには、社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けさせることが重要となる。そしてこのような「生きる力」を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが必要なのである。

したがって、生活科の授業においては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を育成する学びのプロセスにおいて、自分の思いや願いをもち、具体的な活動や体験を行いながら、直接対象と関わる中で感じたり考えたりしたことを表現し、行為していく探究的な学習過程の充実を図ることが重要となる。そのためには、子どもが見通しをもって学習に臨むこと、友達と関わり合う中で自分の学びが充実すること、自分の学びや成長を振り返ることの3つが大切なポイントとなる。また、生活科における「深い学び」へ向かうためには、

○感じ、考え、気付くなどの身体を通して対象に直接働きかける体験

○比較、分類、関連付け、視点移動などの分析的思考を育む

○工夫、試行、見通し、予測などの創造的思考を育む

○伝える、相互交流をする、振り返るなどの表現

(「中央教育審議会教育課程部会『生活科・総合的な学習の時間WGにおける審議のまとめ』2016)

を学習展開に効果的に組み込む必要がある。

具体的には、次のような点に留意することが重要であると考えます。

- 具体的な体験や活動から思いや願いをもたせること
- 個別的な気付きが関係的な気付きへと質的に高まるような学習過程の工夫
- 伝え合い交流する場の工夫
- 振り返り表現する機会の設定
- 自分の活動や気付きの価値を自覚できる場の工夫
- 地域とのかかわりの重要性

3. 主題の意味するもの

本校では、「地域を学びの糧に、確かな力を育てる生活科学習指導の工夫」を学校研究主題とし、学校研究主題について次のようにとらえている。

①「地域を学びの糧」について

「地域を学びの糧」＝地域のひと・もの・ことを生かし、地域とのかかわりを重視した学習活動を行う。

自分自身、身近な人々、社会及び自然と直接関わる中で、それらについて気付くことができるようにするとともに、自分自身や自分の生活について気付くことができるようにするための学習の対象として、地域社会とのかかわりを重視した学習活動を展開していくならば、次のようなメリットが得られるであろうと考えた。

- 子どもの積極的な関心を引き出し、問題意識につなげていくことができる。
- 子どもの直接経験や生活実感に沿って、思考や追究活動ができる。
- 調査方法や学習方法の習得につながる。
- 地域への関心、愛着、誇り、つながり、参画の意識を育てることにつながる。

②「確かな力」について

「確かな力」＝身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、具体的に活動したり体験したりすることを通して、子ども一人一人の確かな資質・能力を育成すること。

生活科では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿った具体的な資質・能力を身に付けさせることが重要である。

そして、その際に必要なのが、「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かすことである。身近な生活に関わる見方・考え方とは、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとすることであり、この見方・考え方の深まり（質の向上）が生活科でねらう資質・能力の確実な習得につながると考えられる。

そのためには、子どもの思いや願いから具体的な活動や体験を行い、感じたことや考えたことを表現するという手段を通して気付きの質を高めていく探究的な学習過程の充実を図ることが何よりも重要である。

そこで、本校は、探究的な学習過程の中に地域とのかかわりを重視した学習活動を位置付け、自分自身や自分の身の回りとの関係を実感しながら身近な生活に関わる見方・考え方を深めさせることを通して、自立し生活を豊かにしていくための確かな資質・能力の育成を図っていこうと考えた。

4. 研究仮説

地域とのかかわりを重視した学習過程を構築する。その中で、生活に関わる見方・考え方を生かした学習活動を工夫するとともに、効果的な教師の支援のあり方を工夫するならば、子どもの活動意欲は高まり、自立し、生活を豊かにしていくための資質・能力が育つであろう。

5. 仮説実証の手立て

①地域教材の工夫

[地域教材のよさ]

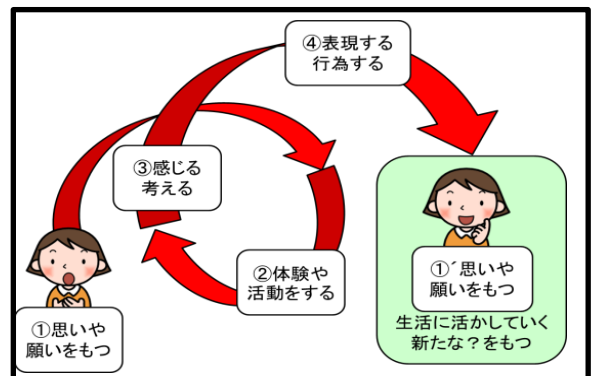
- ①人々や場所への親しみや憧れをもち、積極的に関わろうとする気持ちを高めることができる。
- ②思いや気付きを明らかにし、関わりを更に広げたり深めたりすることができる。
- ③自分と地域のつながりを実感し、よりよい生活に向けての思いや願いをもたせることができる。

[地域教材設定の視点]

- ①子どもが親しみや愛着をもつ人や場所への関心を高められるようにする。
- ②具体的な活動や体験の仕方に気を付けるようにする。
- ③子どもの直接経験や生活実感、本物（人・もの・こと）との出会いに沿って、思考や追究活動ができるようにする。
- ④自分との関わりにおいて対象を捉える「見方」、自分自身や自分の生活について考える「考え方」を身に付けていくことにつながるようにする。

②見方・考え方を生かした学習過程の工夫

生活科における「見方」とは、「自分との関りにおいて対象を捉える」という対象の捉え方であり、「考え方」とは、「自分の思いや願いの実現」に向けて物事を判断したり、考えたりする思考の方向性である。学習活動を設定する際は、図1のような学習のプロセスを各単元の学習の中で繰り返しながら、思考力、判断力、表現力の基礎を育んでいく。子どもは、表現をする際、相手意識や目的意識に基づいて表現内容や表現方法を考えることになる。また、表現した結果から、考え直したり新たな思いや願いが生まれたりして、前の段階に戻ったり次の段階へ進んだりする。このように思考や表現が一体的に行われたり、繰り返されたりすることができるような学習展開を設定する。



【図1 生活科の学習プロセス】

具体的には以下のような手立てを行う。

(1) 子どもが自ら思いや願いをもって動き出す対象との出会いの場の設定

資質・能力を確実に育成する生活科の望ましい学習をスタートするには、教師の指示からではなく、子どもが切実感のある思いや願いを持つことから始まる。そのために、子どもと対象との出会いの場を意図的に設定し、そこで子どもが抱いた思いや願いをもとに活動への意欲を喚起していくことが肝要である。意図的な場とは次のようなものが考えられる。※表2参照

- ・子どもにとって既知と未知が混在している対象との出会いの場
- ・子どもにとって意外性のある対象との出会いの場
- ・子どもにとって自分の関わりの価値を自覚できる対象との出会いの場

出合わせる対象の視点	子どもが抱く思いの例	焦点化された思いや願いの例
既知と未知が混在する対象	○これは・・の苗なんだね。そういえば、おばあちゃんが庭で育てていた・・を食べたことがあるよ。自分も育ててみたいけど、どうすればできるかな。	○自分たちの手でいろいろな野菜を育てて食べてみたいな。
意外性のある対象	○糸と紙コップだけで、Aくんの声がすごく聞こえてびっくりしたよ。おもしろいね。	○身近なものを工夫すれば楽しいおもちゃがもっとつくれそう。
自分の関わりの価値を自覚できる対象	○お母さんからお手紙をもらったよ。ぼくがした・・のお手伝いがすごくうれしかったみたいでぼくもうれしくなったよ。	○お手伝いをもっと増やしたら、おうちの人をもっと助かって喜んでくれそう。

【表2 対象との出会いの場の設定】

(2) 思考を働かせる学習活動の工夫

生活科では、図4のように、子どもが自分自身や自分の生活について「見つける・比べる・たとえる」など分析的に考えたり、「試す・見通す・工夫する」など創造的に考えたりする学習活動を設定する。

そうして考え、表現する活動を友達と一緒にやることで、一人一人が育む思考力、判断力、表現力が共有され、これらをより一層高めることにつながると考えられる。

子どもが自分との関わりによって対象を深く捉えたり、思いや願いを実現しようとする有効な考え(図2)をもったりするために、次の2つの思考活動を工夫して構成する。

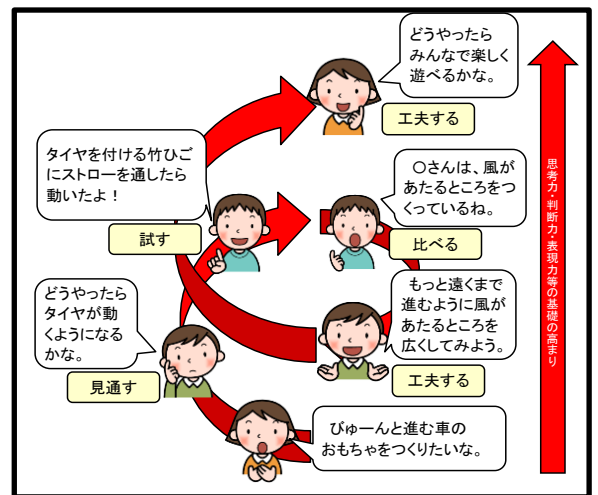
- 比較、分類、関連付け、視点移動などの分析思考を働かせる活動の工夫

自分との関わりによって対象を深く捉えるためには、見つける・比べる・立場を変える・選ぶ・見分けるなどの学習活動が必要である。そのために、資料となる図鑑などを常に見える位置に設置したり、意図的にグループ編成を行った小グループで比べ合いの活動を設定したりする。小グループでの活動の際には、ワークシートやホワイトボード、写真などのICTを活用することで思考を可視化・操作化しながら比べることができるようにする。

- 工夫、試行、見通し、予測などの創造的思考を働かせる活動の工夫

分析思考を働かせる活動を通して、子どもはさらに自分の思いや願いを実現しようと考えられる。そこで、特徴を生かす、試行錯誤する、計画を立てる、生活に生かすなどの学習活動を取り入れる。

材料コーナーやお試しコーナーなどの場を設置し、特徴を生かす活動を充実させたり、試行錯誤したりできるようにする。また、見通しや計画を立てることができるようこれまでの活動の流れや子どもたちの考えの変化を写真や絵などで掲示するようにする。



【図2 考える子どもの具体例】

○ 見方・考え方を生かす教師の支援の工夫

子どもの見方・考え方を生かすためには、図2のような試行錯誤や対象に繰り返し関わる体験活動を行うと同時に教師の働きかけや見取りが重要である。

子ども一人一人の気づきを深め、個別最適な指導に生かすために、支援計画表を作成する。教師は、あらかじめ子どもの考えやつまずきを予想し、具体的な声かけや新たな気づきにつながるきっかけ作りをすることに加え、その子どもを誰とつなぐかなどの働きかけを計画する。その際、つまずいている児童の実態と、それらの解決につながりそうな、友達のよい考えに着目し、書く内容を絞り、焦点化した支援計画表(表3)を工夫していく。

秘 生活科「たのしいあきいっぱい」支援計画表 1年2組				
◎他の子どもと繋げる ○見守りながら支援 △支援が必要		黒板	振り返りカード	
まといれ① ◎・まどを増やしたい。 田治 ・カップを付ける(大・小)。 ・大きい箱を使う。 △佐伯 ・絵ボールを使って大きくしたい。 ・材料コーナーへ連れて行き、箱を運ぶように助言する。 山内○	けん玉① 坂口○ ◎・点状をつけたい。 中釜 ・壊れないように種子をしたい。 ・どんぐりでやってみよう。 古田○	けん玉① ◎・けんだまに点状をつけたい。 福岡 ・まっぼりの大きさをかえる。 ・あきを付ける。 中村○ 中山○	おみせやさん ◎中島 ・種子コロしたい。 ・まぼぼをつかいたい。 △高野 ・プレスシット、輪子をつくる。 ・あきを増やしたい。 内門○	やじるべえ・あわせえ ◎中津 ・やじるべえに線を書く。 ・もっとやじるべえを増やす。 小川○ △富谷 ・お休みが多く、作業が遅れている。 附田○
まといれ① まとあて 司**	マラカス① ◎・溜り穴をつけたい。 原 小さいどんぐりや大きいどんぐり	マラカス① 櫻**○	マラカス① ◎・楽器を増やす。 高 (たに、もっくん、鈴)	めいろ さかなつり どんぐりごま 田○

【表3 支援計画表】

6. 研究構想図

